

甘粕正彦は鬼と人の勇気が見たい。

ζ+

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

帝国は薄々鬼の存在に気が付き始めていた。

その調査を命じられたのは、若くして憲兵中尉の甘粕正彦。

調査の中で鬼との戦闘により、記憶と力を取りもどした彼が出会ったのは、鬼と人の間に生まれたある姉弟であった。

これは、その姉弟による逆襲劇。

殺し殺される憎しみの連鎖を終わらせるための物語。

※オリキャラの姉弟が主人公です。

※4／7 22：00 第0話（短い導入部分）投稿予定

目次

<前編>

0 0. 「すべての始まり」 1

0 1. 「殺鬼事件」 4

0 2. 「姉弟」 10

0 3. 「蝶屋敷」 17

0 4. 「元凶」 23

0 5. 「地下」 30

<後編>

0 6. 「鬼」 39

<前編>

00.「すべての始まり」

side by ???

打ち込まれた拳に、彼はびくともしない。
まるでダメージなどなかったかのようだ。

「ははははは、素晴らしいぞよくやったッ！」

それどころか、その向かってくる——挑む姿を見てどこか愉快そうに笑った。

「全人類を敵に回しても我を通し、生を掴もうとするその気概。あらゆるものを粉碎して直進しようとする独尊。これを勇気と言わずなんと言うのだ。ああ、今世でも、友セツのような者にこうして直接出会えるとはッ」

彼は平等な裁定者であり、それゆえにあらゆる局面で差別をしない。

己が判断基準に従って、いかなる功績にも公正な評価を下す。

それは、己に向けられる敵意ですら、微塵も動じず談笑さえしている始末である。

「なんなんだよ……なんなんだよお前はあッ！」

彼に対するものは人喰いの”鬼”。

人ならざる者。

しかし、その拳を難なく防がれたように、この場において捕食者の立場は無い。

なぜならば——

「何を驚く、ここは夢。差し詰め、俺にかけてた術は邯鄲法に似た何かだろう？　そこに招待してくれたのは他ならぬおまえではないか。俺は今、久しい感覚にとても感動している。感謝しよう」

「ふざけないで。俺は夢を見せるが、見ることなどはありえない。ましてや引きずり込まれるなど……何をした？」

そう、ここは夢。

当然ながら、現実の彼らは別の場所にいる。

外のルールは適応されない。

「まあ、待て。まだ何もしてはおらぬよ。ただ夢に潜ったにすぎん。まずはゆっくり話そうではないか」

彼はどこらともなく現れた、近くの椅子に腰掛ける。

鬼はそこぬ警戒した様子で、迂闊には動かない。

いや、動けない。

「ありえない、夢を潜る？ 何を言うかと思えば戯言か。夢は人によるし、それは精神の核あってこそ。故に夢が繋がるなど馬鹿げている」

この鬼も、夢を扱うもの。

夢で喰らい、勝ってきた。

その得意分野で誤魔化されるなど、鬼のプライドが許さなかった。

「ふむ、そう捉えているのか……惜しいな。だが、その先がある」

「何？」

しかし、鬼は本質を理解していない。

ここは夢。

それを道具としてしか捉えられない鬼では、その先は見えない。

「簡単に言ってしまうと、人の集合無意識——それを第八層、阿頼耶^{アラヤ}と
言う。お前の言うそれは、第一層。分かるだろう？ 入り口にすぎ
ん」

「先があるというのか？ そんな……」

「今回はお前のお陰で一層から夢界^{カナン}に入り、私がここ第三層へ招待し
た」

「招待……もはや、俺の血鬼術ですらない、超えているというのか」

鬼も人形ではない。知能がある。

例え第三層が指し示す意味を知らずとも、本能で理解し、この瞬間、
総ては目の前の男が支配していると悟っていた。

「ほう、おまえのソレは”けつきじゅつ”と言うのか。ああ、そう不思議な顔をするな。おまえの想像通り、帝国陸軍は鬼を追っているが、

鬼を知らぬのだ。何せ捕まえられぬし、仮に捕えても、その驚異的な治癒能力で尋問がどれ程効くのか。さぞや鬼から見る人間の姿は滑稽であるだろう。ゆえに——情報交換といこうではないか」

ここは夢。

蘆生
彼の世界。

鬼は鬼に成ってから初めての恐怖を知った。

鬼の力は夢を手繰ること。

物理攻撃も効かない。

最早、どうしようもない絶望感に体さえ、ガタガタと震えて止まない。
い。

「まずは自己紹介といこう。俺は憲兵中尉、甘粕正彦。あまかすまさひこ俺が俺を取り戻した以上、これからは人の輝きのみに留まらん。鬼の勇気も存分に試させてもらう。なあに、まだ夜が明けるには十分な時間がある。長い付き合いになるのだ。まずは、おまえの名を聞かせてくれないか？」

01. 「殺鬼事件」

私にはヒトとか鬼とか、違いが分からない。

それは、あまりにも鬼に触れすぎたせいでもあるし、私自身、両方の血が流れているからかもしれない。

ヒトの父と、鬼の母。

私はそんな二人に愛され、育ってきた。

なぜ人を喰らう鬼がヒトを求めたのか。

なぜ餌でしかないヒトが鬼を愛したのか。

私は両者の関係について、知れば知るほど分からなくなっていくたが、まあ、そんなものは当人たちの間で分かっていたらいいと思う。

とにかくその結果として私たちが生まれた。

そして、私たちは知っていた。

母から、本来鬼はヒトを食い、日光を嫌うこと等、鬼について。

父からは、名高い重工系企業の社長令嬢としての振る舞い方と、同時にヒトの醜さを——ヒトとして生きるための全てを。そして、体術と、その基礎たる呼吸をも学んだ。

「ねえさん」

親子4人で、鬼とか人とか関係なく暮らす日々。

きつとそれらは、幸せな時間だったのだろう。

だから時よ止まれ。時よ止まれ。

この刹那を永遠に——

「ねえさん起きて」

そう、この微睡みも永遠にッ！

「いや起きてるよね、もぞもぞ虫みたいにうごいてんのわかるよ……だから、ごめん。遅刻しないためにも、こうするしかないんだ」

「うひゃっ!?!」

さ、寒い。

凍えるように寒い。

というか、雑な扱いに心も寒い。

「もうだめだ……私はここで行き倒れちゃうんだ」

「布団剥がしただけなのに、何言ってるの……って、下着で寝るのやめなよ」

「あ、あと5分……」

「風邪引くよ、ほら朝あさはんもできてるから」

止めの冷静なツツコミ。

だけど風邪引いたら、布団奪ったの信明のふあきだから、君のせいだぞ。

「さあ、行くよ、信明。ちゃんと薬飲んだ？ 忘れ物はない？」

「ホントにねえさん、寝起きが残念すぎるよね……普段はしっかりしてるのに」

う、うっさいし。

「つよし、鍵も掛けたし大丈夫だよ。父さんも取り調べで帰ってこないだろうし、施錠はしっかりとしないとね。荷物はもう陸軍の方へ送ってもらってるし、甘粕大尉への書状もある。もう大丈夫だよ」

そう、私たち、桑島くわじまみずきと桑島信明の姉弟は今日から陸軍にお世話になる。

しばらく、いや、ひよつとしたら一生この屋敷には戻ってこられないかもしれない。

「そう、じゃあ行きましょうか……行ってきます」

理由は簡単。

私たちの存在が見つかったからだ。

鬼は、鬼の血を持つものは人間社会では脅威とされる。

故に、軍の監視下となるのだ。

事の発端は、数日前。

私の母が殺され、その容疑者の祖父が失踪したことに始まる。つまり話だ。

鬼と結婚した父、その祖父は何らかの鬼狩りの組織に属していたらしい。

当然父は祖父の事を知っていたが、鬼である母を“奴ら”の一味で

ある祖父に会わせる訳にはいかなかった。

元々、父は祖父と仲が悪い。

幼少期山に隠り、鍛練する日々が嫌になって父は、反抗する形で町へ出た。

そして、薬学を極め、火薬の製造に始まり、今では小銃や、蒸気機関車、『無限列車』を始めとする機械を設計、製造する、桑島重工を立ち上げ、帝国の軍需産業の筆頭として成功していた。

そんなある日、祖父が山から出てきた。

理由は分からない。大方、家族が恋しくでもなったのだろう。

父の名は今や調べればすぐに出てくる程……長らく疎遠であったとしても、すぐに見つけられた筈だ。

父は来訪者の名前を聞いて焦った。

『通せ。あの頑固じじい、今更何をしに……』

数十年ぶりの再開。

父がどんな話をするのかは気になったが、結局教えてくれなかった。

私は玄関で、初めて祖父に会ったのを覚えている。

『そうか、お主らは奴の娘と息子か』

『はい、みずきと申します。こっちは弟の信明』のぶあき

『こんばんは、父がお世話になってます』

『お父様の部屋まで案内します、こちらへどうぞ』

私の第一印象は、白い髭の目付きの悪いお爺ちゃんといった感じだった。

頬の傷は歴戦の戦士といった佇まいで、三角の模様が散りばめられた、イチヨウの色をした着物と、腰にさした刀が特徴的だった。

私たちよりも背が頭一つ分小さいながらも、その圧、存在感がとても強い。

『僕は桑島慈悟郎じごろう、お主らの父の父、お爺ちゃんじゃ。まさか、孫がいとは驚いたわい』

『え、お爺ちゃん？』

『ねえさん、口調』

『いいって、身内じゃん!』

『それでもお客様。父さんがまた煩く言うよ』

『成金がよく言うぜい。そんなお嬢様を演じる方が滑稽ですことよ?』

『……まあ、確かに?』

『ほっほっほ、仲が良いの』

自慢ではないが、そこそこ大きい屋敷なので、部屋につくまで少し話をした。

こうして話していると、厳しくもお茶目なおじいちゃんという印象が強い。

だが、父の部屋を目前として、その雰囲気は一変する。

『案内感謝する。儂は奴と話がある。お主らと会ってさらに話すことが増えた。長くなるじやろう。今夜はもう遅いから、戻って寝なさい』

私たちは安心しきっていた。

そのまま言われるがまま、自分たちの部屋に戻る。

『お爺ちゃん、”呼吸”をしてた』

『え? 呼吸は普通にするものじゃない』

『全集中の呼吸だよ。ねえさんだって、気付いてたでしょ?』

『え、あ……あつ! 当たり前じゃん』

『きつと、父さんに体術とか教えたのがお爺ちゃんだ。だけど、父さんは呼吸しか知らないっぽかった。今、お爺ちゃんがやってた、ずっと全集中の呼吸をするなんて考えもしなかったよ』

『えぐいね。あれしんどいのに。私たちなんか学園の行事くらいでしか使わないよね。マラソンとか』

『それでねえさん、”無敵の生徒会長”だなんて呼ばれてるんだ。おかしいと思ってたんだ、ねえさんは運動音痴なのに。セコイね』

『なんだとお。ボロクソいうなし! 私ら薬で鬼の力なんて抑えてるし、むしろ日光に弱い貧弱な人間だよ? 使えるもん使わなきゃ』

私たちはこのころから薬を服用していた。

元々は母の”衝動”を押さえるために調合されたものらしい。

これによって、人を食いたいという衝動に駆られることなく、普通に暮らせる。

とはいえ、それは私たちの話。

母は鬼そのものなので、ここまで効果がでない。

今は加えて父の血を飲むことで理性を保っているそう。

もし、その血で満足できなくなってしまったら——なんて、考えたこともなかった。

きつとその時は、薬学にも長けている父がなんとかするだろう。

父は優しく、頼りになる人だ。

だからきつと、大丈夫。

翌日。

私たちの日常は、ここで終わった。

屋敷内で黒いハエが飛んでいるなんて珍しいなあと思いつつも歩を進めると、お爺ちゃんはもういなかった。

代わりに待っていたのは——地獄だ。

『どうして、どうしてこうなった……だけど、くそつ、何かまだ手はあつた筈なんだ……』

私たちの目の前には、首を切り落とされた母の姿と、それにすがり付く父の姿。

母は大部分が灰になっており、その亡骸は原型が今なお崩れていつている。

近くには血に塗れた、黄色い刀身の刀が転がっていた。

私には何が起こったのか咄嗟に理解できなかった。

気が付いたら、もう日が沈み、私はベッドの上に転がっていた。父が運んだのだろう。

散々泣き喚いて、力尽きたのだろう。

この屋敷には、私たち家族4人……3人以外は誰も住んでいない。私は父の書斎に向かった。

この夜の時間も、父は家族のために仕事をしている。
まだ起きているかはギリギリの時間だった。

『みずき』

そこには、目を腫らした父の姿があった。

『よく聞きなさい。これから忙しくなる』

父が話すにはこうだ。

鬼に対する警戒として、帝国は陸軍の秘密部隊によって、国の重要人物とその家族、親族をマークしている。

父は軍事産業において要所のメーカーの社長だ。言うまでもなく
厳しいチェックが入るだろう。

この死体が残らなかつた母の死、この意味は大きい。

母が鬼であつたと言っているようなものだ。

ゆえに警察ではなく、その部隊が調査にくるとのこと。

そして、一番大事なのは――

『みずき、信明。二人の身柄を帝国陸軍に預ける』

『ツ！ どうして！』

『鬼と人間の子供。奴らに知れたなら必ず殺しにくる。私の父が妻を
殺したように。彼らは病的に鬼を憎んでいる。すでに知られている
可能性がある以上、ここは危険だ』

『え、でも私たちは何も悪いことしてないよ』

『その通り。私がそれを一番よく知っている。心配するな、その特務
部隊の指揮は、私の古い友人がとっているのだ。彼は信頼出来る。も
う、奴らに私の家族は殺させない。これは君たちを守るためだ』

その後、本当に警察や憲兵でない、黒軍服の集団が私の家の調査と、
私たちへの聴取を行った。

なぜ母は死ななければならなかつたのか。

なぜ母が死んだというのにお爺ちゃんはどこにもいないのか。

”奴ら”とは何だ？

そんなモヤモヤしたものを抱えながら、今に戻る。

02. 「姉弟」

「日光がキツイな……」

「え、そう？」

「うん、まだ昼間ほどではないんだけどね」

私と信明は早朝、日が昇ってすぐの街道を歩いている。

「ねえさんは母さんの血が薄いから……まあ、僕も普通の鬼に比べたら、日の下を歩けるだけましだけど」

私と信明を比べると、確かに私の方が鬼の血は薄いらしい。

それは、今このように日光の下でよくわかる。

私は日焼け止めのクリームを塗れば肌がチリチリと痛む程度で済むが、信明はそうはいかない。

鬼の特徴として、日光に極端に弱く、太陽光が当たったところは炭化してしまうというものがあるが、弟はそれが顕著に出てしまう。

通常の衣服で肌を隠せば死にはしないが、それでも長時間の日光は布越しでも毒になる。

血が沸騰し、皮膚が火傷した後のように爛れ、じわじわと痛みが全身に回り、強くなっていく。

そのうち、炭化が始まり、その恐怖は何事にも言い換えられないものがある。

もちろん、そんなの直視できないだろうが、感覚で自らの体が崩れていく様子が分かっってしまうだろう。

正気を保てるわけがない。

そのため、信明は学園の体育系の種目や学外活動は不憫にも見学が多かった。

「ねえさん、憐れんだ目はよしてくれ」

「あ、いや……そういうつもりじゃ」

「……分かってる、冗談だよ」

実際、外で自由に動ける分、筋肉量や体力では私の方が上だ。

その点を弟は引け目を感じているらしい。

時代は、男性こそが社会を回し、家を守る大黒柱と主張する” 太正

”の世。

男性は力強さの象徴という世の中では、気にしてしまうのも仕方の無いことだろう。

「信明」

「……………ん？」

「私はね、別に”強い人が好き”なんてこと言わないから」

思わず私の口から出たのは、私にも思いもよらぬ言葉であった。

「なにそれ、どうしたの急に」

「いや、なんでだろ……………言わなきゃいけない気がして。ちゃんと今の信明のことが好きだよって」

「えっ、ちょ……………はっ？」

そして、なぜだろうか。

脳裏にチラつくのは、■■■■。

その大罪、ゆえに全力を出さないことがあつてはならないと。

……………ん？

なんか信明が赤面してる。

って、私何言つてんだ！

「ち、違うの！… 違わないけど、違うの！…」

「は、はあ？」

「ま、まあ、とにかく。これからも信明を頼るし、姉弟揃つて、このよくわからん状況を突破しようってこと！… さあ、いくよ！…」

分からないものは分からない。

不思議な感覚ではあつたが、そんなものを振り払い歩を進めた。

「あ、ねえさん腕引つ張らないで。そんな急がなくても」

「早く着いて、目的地周りで美味しい店でも探せばいいのさ」

「こんな朝っぱらから空いてるとこないよ……………」

「……………お、そうだな」

「……………場所、あつてるよね？」

「……住所は合ってる。ここだね」

私たちは目の前にある建物に驚き立ち止まって眺めていた。絶妙に信明と目線が交わらないというか、動きがぎこちないのは気のせいだろうか。

「おい、君たち。ここは憲兵隊指令部だぞ。何か用かね?」

何か怪しむような目で私たちに声を掛けてきたのは、軍服に身を包んだ角刈りの初老の男性だ。

老いを感じさせぬ鋭い眼光は、その引き締まった大きな体格も相俟あいまって片目からのみでも私たちを萎縮させる。もう片方、左目には眼帯をつけていた。

「あ、あの。私たち甘粕大尉に会いに来まして……」

「甘粕大尉に……? 今奴は浅草で起きた事件の調査に出ているぞ」「え!?!」

「僕たちは今日ここに来るよう言われていたのですが」

「ふむ、とすると桑島くわじま姉弟かね」

「はい、あなたは一体……?」

「まあ、来なさい。中で待つといい」

そう言って、男は敷地内を歩いていく。

少し進んだところでちらりと様子を伺うことから、どうやらついでこいとのことらしい。

素直に私たちは従った。

中に入ると、門番の憲兵や、通り過ぎる職員の人たちが皆、男に敬礼を欠かさない。

まるで重鎮のようだ。

何者なのだろうか?

「私は陸軍中将、甘粕重太郎しげたろうという。君たちの言う、甘粕正彦を“特務部隊”の隊長に任命した者だよ」

「ええ!?!」

マジもんの重鎮だった。

中将と言えば、軍の中核にいる人物を指す。

しかも“特務部隊”の人員を決めれるほどの。

「では、僕たちが”何なのか”もぐ存知と？」

「勿論。そして、大尉と君たちの父親、桑島社長が懇意にしていることもね」

「なるほど」

中將は深く掘り下げようとしなかった。

言外に、ここで話すことではないと圧をかけているようだ。

「珍しい名字のような気がします、意外と多いものなんですね」

「いや、正彦は従弟だよ。だから身内びいき鼻肩びいきと言われても結構。実際、彼は優秀な男だからね」

「親戚ですか」

「ああ、故によく知っていた。彼はまるで情熱をどこかに忘れた機械のような男だった。あらゆる業務を忠実に、淡々とこなし、急な変化やトラブルをとことん嫌っていたなあ。彼が当時、若くして特高警察憲兵中尉まで登り詰めたのは、一重にその勤勉さからだろう」

「中尉……？」

「うむ、任命した当時はな。今は調査による各種功績で大尉だ」

「やっぱりどんな組織でも、コネっていうのは大きいのだろうか。」

大尉とは会ってないから雰囲気は分からないが、親戚がトップに立っているなら目もかけられるし、昇進もしやすいのかもしれない。

真面目な人物だったのなら、とても良い環境だろう。

「しかし、私が隊の指揮官、鬼の調査を命じてから全て変わった。やれ輝きが見たいだの、人の希望を信じるなど、まさに生まれ変わったかのように生き生きとし始めたのだよ」

「へえ……？」

なんだろう。

背筋がぞわぞわとする。

真面目な人物じゃなかったのか。

なぜにトンチキなことを言い始めてしまったのか。

「立場は人を変えると言うが、それで成長してくれたというのは嬉しいものだねえ。今の彼の方が断然面白い。それから、『我も人、彼も人、故に対等』だったかな。彼はこの言葉が好きで、信念とす

るようになったようだ」

あ、でも大丈夫そう。

聞く感じ、人格者っぽい様子だ。

先程のぞわつく感覚は気のせいだろう。

「ねえさん大丈夫？ 顔色が青くなったり赤くなったりころころ変わってたよ」

「だ、大丈夫だよ。大丈夫。気にしないで」

「少し歩き疲れてしまったかな？ もう着いたから、この部屋で座ってなさい。飲み物は……確か、アイスティーしかなかったはずだが、よかったかの？」

「お気遣いありがとうございます、お願いします」

では少し待っておれと言われ、私たちは部屋で待つこととなった。

長いテーブル一つに、向かい合って乱雑に椅子がいくつも並べられている。そして正面には大きな黒板がドンと備え付けられており、近くには中型のモニターも置いてある。

なるほど、ここは会議室のようだ。

よほど慌てて出ていったのだろうか。

その黒板には、乱雑にチョークの跡を消したようであらうと文字が読めてとれた。

「ッ！ ねえ、信明。これ……」

「うん。『浅草』、『鬼』、『耳飾りの少年』……あとは、『集団幻覚』か」

「かろうじて読み取れるのはそれぐらいだね。浅草ってことは、甘粕大尉が不在の理由はこれかな」

「そうだね……鬼は思う以上に身近にいるのかもしれない。死人が出てないといいけど」

「鬼が出た以上、残念だけど難しいでしょう。私たちの母さんが使っていた薬さえあればこんなことも……」

「そうだね。でも、仮に衝動を押さえられても、それまで喰ったという事実は消えない。遺されたヒトは恨むだろう。”殺人”に変わりはない」

「信明、それは正しいけど間違ってる。母さんはいつも言ってた。そ

の罪は忘れてはいけないって。懺悔し、心を入れ換えるなら許すことも必要だよ。それに、私たちが許さなくちゃ、母さんを否定することになるんだよ?」

「それも一理ある。それなら、母さんを殺した奴をねえさんは許せるのかい? 悔い改めて、泣いて懺悔したら許すの?」

「私は——」

犯人は……いや、あの夜のことを考えれば自明だ。

それは身内だからかもしれないが、それだけではないことも確かだ。

この争い。

鬼とヒト。

殺しあっているのは、いつまでも終わらない。

お互い、生きているのだ。話せるのだ。

獣ではない。

薬もあることだし、きつといつか和平を締結できる筈だ。

「だから許すよ。それでも」

「そうか……ねえさんはそう考えるのか。でもごめん、僕は許せない。僕たちの平和を奪ったんだ。報いは受けさせる」

「信明……」

「勿論、僕も裁かれるべき存在だ。見ず知らずの人を喰った母から生まれた」

「そんなの、辛いだけだよ……ぐるぐると回って、終わらない」

「いいんだよねえさん。ねえさんの分の罪は無いに等しい。本当はねえさん、薬がなくなつて衝動をコントロールできてるんですよ。なら、ヒトとおなじだよ。母さんの罪、もとい鬼としての罪は僕が背負うものだ」

「やめてよ信明ッ! そんな悲しいこと言わないで」

信明はいつのまにこんなことを考えるようになったのだろう。

考え方は私とは対極にあるように感じる。

その考えの根底にはみずきと信明^弟体質的な違いにある。

それは事実だ。

でも、私たちは家族。

絶対に一人で背負わせたりなんかしない。

「私だって母さん鬼の子供。悪いけど、信明がそう言うなら、その罪は私が貰ってくわ」

「え？」

「知ってる？ 古来より姉のものは姉のもの。弟のものは姉のものと決まっているの」

「そんな横暴な……なら、弟の人権は一体……？」

「そんなものないわ！」

「ええ……そんなこと言うなら、僕はねえさんの分まで恨んじやうよあ？」

「構わないわ、好きにして。私たちはこの世で唯一、鬼とヒトの子供。その全てを分かち合って何が悪いの」

「無茶苦茶だよ」

「それが私、桑島みずきよ」

03. 「蝶屋敷」

「——という訳でだ。特務部隊に入らないか？」

戻って来た甘粕中将に言われたのは、思いもよらないことであつた。

「軍人として鍛え上げる。これは君たちの安全を守ることに繋がるし、お客様扱いというのもつまらぬだろう。軍属ゆえの多少の不自由はあるかもしれないが、ある程度はなんとかしよう」

そう言つて中将はアイステイーに口をつけた。

それを3人分持つてきたのは中将のだが、将校が給仕の真似事をしているのはどうなのだろうか。

……と弟が聞いてしまったが、なんでも人手不足だそうだ。

ここで私たちが特務部隊に入れば、護衛の人手も省けるし、戦力も増やせるとのこと。

加えて、中将は普段、陸軍省参謀本部に努めているらしく、作戦概要や部隊構成に口出しできるらしい。

「私たちは民間人ですよ……？」

「うむ。しかし、”鬼”と同等の力を扱えるのなら色々期待できる。隊の特色から、配属出来るのはある程度戦えるやつでないといけない。その点、君たちは伸び代が大きいそうだ」

「結局、危ないことには変わりはない気が……」

「いや、変わらないなら入るべきだよ、ねえさん。中将、母を殺した容疑者、桑島慈悟郎じごろうはまだ見付かつてないですよね」

「ああ、消息は掴めていない……なるほど、確かにこの隊にいればいずれ見つけることも出来よう」

「なら、聞ける。なぜ母さんを殺し、刀を置いて逃げたのか。なぜ僕たちは生かしたのか。あなたたちの言う、”奴ら”なら鬼と見れば見境なく殺すはず……なにか事情があるはずだ。それを知りたい」

「うむ、それもよからう。さて、みずき君はどうかね？」

信明は先程、許さないと言った。

それを、”事情を知りたい”と、希望を持つてくれたようだ。

それならば私も、共に在るべきではないだろうか。

「私も、祖父を見つけないと思えます。1度しか会ってないけど、それでも母を殺すようなヒトじゃないって気がした。父も何か教えてくれないことがあるみたいだし、自分たちで問います」

「……ありがとう。君たちの勇氣に感謝しよう。そして称えよう」

どこか噛み締めるように中将は言った。

「でも、1つ気になる点があります。鬼の調査をしているならまさに僕たちはモルモット。どうして、わざわざ隊への勧誘を？」

「知つての通り、桑島重工は今や国内の軍事産業の中核に位置する企業だ。当然、軍部との関わりは強い。私も君たちの父君とお会いしたことがある。子供思いの良い社長だった。そんな彼のご令嬢、ご子息を実験などに使えんよ」

そうか、桑島重工。

父の会社は軍と繋がりが深いのか。

だから甘粕大尉と友人で、中将とも会ったことがあると……

確かに軍需品だけでなく、鬼の研究という点でも、父さんは衝動を押さえる薬を作ってしまうくらいだし、親交は深いのもかもしれない。「では、申し訳ないが基礎訓練と軍人としての基礎学習は行ってもらうことになる。構わないかな？」

「了解です」

こうして、私たちの新しい日常が始まった。

……始まってしまった。

このときの私たちは思いもしなかった。

この選択が——いや、この運命が全て仕組まれていたことだと。

「……こんな朝早くから、来客ですか」

同刻、蝶屋敷。

本来ならば、蟲柱、胡蝶しのぶの私邸であるが、しのぶの意向により邸宅を、負傷した隊士の治療所として開放している。

いわば、鬼殺隊の病院だ。

故にこそ、鬼に絶対侵入されてはならないし、場所すら掴まれてはいけない。

今や、御屋形様の屋敷に次ぐ重要拠点の一つだ。

無論、そのために“地相学の権威”を呼び、藤の花も植え、呪的にも物理的にも鬼を寄せ付けない万全の防衛措置がとられている。

「師範？」

「カナヲ、日輪刀を持ってきなさい。アオイ達はカラスを。お館様に緊急事態と伝えてくれますか。その後は地下室へ」

「——ッ！ はい！」

よつて、そこへの侵入者があるならば——生きては返さない。

実際この場には下弦程度の鬼なら葬る、その戦力が存在した。

言うまでもなく、女主人、胡蝶しのぶ。

その後継者たる嗣子、栗花落カナヲ。

その他非戦闘員も多くいるが、しのぶの指揮能力の高さ故、だれもかれもが足を引つ張らないために、負傷員を抱え“逃げる”という選択肢を間違えなくとっていた。

「Sancta Maria ora pro nobis

Sancta Dei Genitrix ora pro nobis」

何者にも絶対不可侵であるべき城を黒い放射能が蹂躪している。

墮とし、穢すことこそ我がすべてだと誇るように、億の蠅声を引き連れて罪の塊が破滅の快樂を謳いあげる。

その侵攻は貴婦人をエスコートするように紳士的な静けさで、しかしどんな強姦魔をも上回る無恥と暴食の権化だった。

草木、花々が腐った。石畳が溶け崩れた。それがただ歩くだけで地面と塀に亀裂が走り、そこから汚らわしい黄ばんだ粘液がじくじくと

滲み出ていく。

そうして塗り替えられた新たな意匠は——一言でいえば、便所だった。

人命救助の安らぎの空間が、一瞬にして汾陽のこびりついた便器のごとく穢れていくのだ。

「カナヲ、合図をしたら同時に行きますよ」

事実、その男は伴天連の僧衣に身を包んでいた。

聖像画を逆さにすることでパロディ化する騙し絵のような不遜さがあるものの、己は敬虔な信徒であると主張していることは間違いない。

曰く、廃神——神野明影である。

「師範！」

「ええ、見てましたよ。アレが今投げ捨てたのは……」

カナヲが思わず指をさしたその先には、一人のご老人。

神野がゴミのようにつまんで持ってきたソレを、道のわきに投げ捨てたのだ。

「……カナヲ、あの御仁をお願いできますか？」

「はい」

「技の後、すぐに回収してくださいね。では」

2人は屋根から飛び降り、その勢いのまま技を繰り出した。

「花の呼吸——陸ノ型、渦桃」

「蟲の呼吸——蜻蛉の舞い、〃複眼六角〃」

カナヲは首を、しのぶは胴体に毒を叩き込むため、その穢れに突入する。

どちらかを防ごうとすれば、断首か、毒かで殺される。

故に必勝、そのはずだった。

「痛いなあ」

結果は神野は防がず、すべてを受けた。

首が飛び、体には毒を流しこまれ、死に体だろう。

が、そのとき——首無し、穴あきの状態で、神野の腕が宙を薙いだ。同時に発生した羽音のような振動が衝撃となり石畳を粉碎するが、

そこには誰も存在しない。

「外した。見えないねえ」

嘆息するように嘔きながら、しかしそのときには再び五体復活している。

痛いというからには完全に無効かしているわけではないのか。

戯言しか弄さない口からそこを判別することは不可能だったが、今のところ神野が敵手を補足できていないというのは確かだった。

「カナヲ、その老人を抱えて離脱しなさい」

「でも師範……」

「急いで。これは下弦、いや上弦クラスのようにです」

「分かりました。すぐ戻ります」

「いえ、やつぱりゆっくりでいいですよ。丁寧にお願いしますね。蟲の呼吸——蝶ちようの舞い、”戯れ”」

その間にも神速の攻撃は続いていく。

蝶のような軽やかな動きで、胸を、腹を、首を、眉間を——悉く急所に叩き込まれる一閃一閃。

毒の刃をねじ込んでいく。

それに伴い、神野の霧は微かながらも揺らぎ始めているような。

もしや今、悪魔は窮地に陥っているのか。そうともとれる状況ながら、しかし断言できないのは無貌そうぼうに蠢く瞳の色。

変わらずすべてを嘲笑っている双眸が、爛れた愉悦を浮かべているからに他ならない。

「困ったなあ。どうしようかねえ。助けてくれよ。なあ、弱い僕を……」

泣き言めいたセリフを口にしながら、不吉な敬気配だけは増している。

「うふ、ふははは、あはははははははははは——！」

爆発する嘲笑は、毒蜘蛛の大群となって空間を侵食する。

そんな穢れの奔流が女へと襲い掛かる。

「蟲の呼吸——」

だが、ひらりと舞う蝶の一片ひとひらを幻視した瞬間に、標的たる美身は跡

形もなく消えていた。

数十万に達する蜘蛛の知覚と、その糸による網をすり抜けるなど不可能であり、まさしく消失したとしか思えない。

予想外の空振りに目をむいてたたらを踏む神野の挙動は、状態の異常さを無視すれば滑稽であり、笑いを誘う無様さであつたろう。

「——蜂牙の舞、真靡き」

背後から神野を貫いた毒剣が、胸を突き破りその切っ先を覗かせていた。

何たる絶技による体捌きか、背中合わせに立つ女は毒蜘蛛の一匹たりとて踏んでいない。

「凄い突きだねえ」

「……どうして死なないんですか」

「ふふ、愛おしいほどの憎しみを感じるよ。いいねえ、いい笑顔だ。その顔のままもつと憎みなよ」

神野明影はその肉体に実体がない。

霧のような粒子であり、放射能のような穢れであり、蟲の集合体めいた罪と悪意の塊なのだ。

蟲柱と呼ばれるしのぶは、蟲に有効な毒でさえその鞘の中で調合できってしまうため、他の物理攻撃主体の“柱”と比べ、相性は悪くないだろう。

しかし、いくら毒の刃で一部を死滅させたところで、瞬きする間に補充される。

「減らず口ですね。すぐに殺虫してあげましょう」

しのぶは体を思いつきりひねり刃を横に引き抜いた。

一方神野は切りさかれた瞬間にばらけ、人型を失い、また固まって渦巻く蛾の群れとなって、彼女の周りで狂乱の舞を踊る。

「あんめい、まりあ——ぐろおおオリアああアアす」

その蛾の片目——複眼の全てには“喜”の文字が浮かんでいた。

04. 「元凶」

陸軍が鬼の存在に気が付き始めたのは、実は最近の話ではない。

古来より、神隠しというのは国の伝承で言われてきていたが、それは自然災害やら社会情勢やら、大抵は不慮の”事故”でいなくなつたからだ。

当時は調査能力も今よりは遥かに劣っていただろうし、第一地元の有力者が小作人1人程度を気にするなんてあり得ない話だ。

しかし、時代は移り変わり” 太正 ”の世。

戸籍で人々は管理され、その失踪すら事件として取り上げられるようになった。

故に、警察機関と同等の活動をする陸軍省憲兵隊が” 辿り着けない失踪事件 ”。

その裏には何かがあるはずだと、軍部は第一の調査を行った。

結果は言わずもがな。

浮かび上がってくるひと食いの存在。

ある夜化け物を見たという、他愛ない噂話。

” ヒト喰いの鬼 ” という結論はどうに見えていた。

しかし分かったとして、そんな馬鹿げた話、軍部として動くには根拠が薄い。

第一、参謀本部の最優先事項は列強諸国に対抗するための” 軍拡 ”だ。

この調査も、実際には失踪という人的資材のロスの元凶を探るためのもの。

背景にはあくまで戦力拡充の意があつた。

これ以上はコスト以上の効果は得られないと調査は打ち切られる、それが当然の流れである——筈だつた。

しかし、事態は大きく変わる。

当時の陸軍少将、甘粕重太郎しげたろうが声をあげたのだ。

『全ての責任は私がとる。故に、その調査で得られた功績は独占させてもらおう』

同僚達は鼻で笑っただろう。

むしろ、この馬鹿げた調査をすることによって、結果がでなければ奴の評価が下がるだろうと、積極的に支持した者もいた。

そんな中、重太郎だけは気付いていた。

このチャンス。

神話に言われる未知なる力を手に入れられると。

端的に言えば、重太郎は優秀なバカだったのだろう。

当時、軍拡の限界をいち早く提言し、国の未来を憂う反面、この情勢を変える”神の一手”の存在を信じていた。そのあり得ないものこそ、手にいれたいと”本気”で想っていたのだ。

このご時世、精神論者は多い。

気合いだ、愛国心だ、誇りだ、熱量だ。

それらがあれば、一騎当千の軍神にさえ成れる。

そんな背景が無ければ、優秀な男とだけで終わったものの、彼はそれに当てられてしまっていた。

『重太郎さん、それで俺をその隊長に……？ 久々に呼んだと思ったらそんなことを……馬鹿げている』

『正彦、これは決して盲信などではない。私は根拠があつて言っている』

『協力者……ですか』

『そうとも、その協力者は——』

——じんぎしょう 神祇省。

表向きは、天皇による祭政一致、ひいては神道の国家宗教化を目指す方針のために政府の関与を強めるための機関だ。

しかし裏では、”陰陽術”やら”妖”など、オカルトじみた部類の全般を管轄している。

陸軍から見れば、得体の知れない不気味な連中という認識だろう。この首領が話を持ちかけてきたそうさ。

『鬼』はい。彼はそう言い切った。私にそれ教えることが、どういう理屈かわからぬが、うまくいくそうさ』

『なんですかそれは。神祇省じんぎしょうは陸軍省りくぐんしょうをバカにしている。妄想に取り

つかれた非現実主義者達だ。信用できない』

『そこで“実物”を見せられては、どうしようもないだろう?』

『……まさか』

そう、重太郎は魅せられた。

斬つても、砕いても、焼いても、溶かしても……死なずに敵意を向けてくる檻の中の化け物——”鬼”。

神祇省の首領は、部下3人を供に付け、“サンプル”を提示してきた。

『重太郎さん……あなたは、何を見ているのですか?』

『言わずもがな。鬼による”死なずの軍団”。戦場において、”食事に困らぬし、”補給”も必要ない。ただ己を以て敵を制し、喰らい、強くなり続ける。我らが帝国の尖兵としてこれほど相応しいものはない』

食事は敵兵。ニンゲン

補給は、武器も使わねば死ぬことも無いため不要。

陸軍として、これほど理想的な兵士駒はいなかった。

『夢を見すぎだ。そんなもの、待っているのは地獄ではないか』

だが、当時の甘粕中尉も馬鹿ではない。

軍事兵器というものは、いつも自国だけが使うものではない。

我々もヒトならば、相手もヒト。

常に進歩し、同等なものを用意するのは必然なことであった。

そこで待っているのは、不死者の殺し合い。

死なぬからこそその泥沼の戦い。

陸軍の一兵士として、中尉は反対した。

『地獄で結構。列強は今尚繁栄し続けておるし、帝国はそれに追いつけていない。まだ見ぬ”未来”あしたの帝国のため、私がやらねばならん』
『そんな未来、絶望しかない! 申し訳ないが少将、俺は降りさせてもらおう』

『変化を嫌う気持ちは分かる。だが、正彦、お前ほど優秀な者なら、このまま軍部がどこに向かっていくか検討がついているのだろうか?』

『……それは』

列強において絶えない”新型陸上兵器”の噂。
他国由来の蒸気機関が発達する帝国の街並み。

島国故の陸軍戦力が甘んじられていることへの焦りと、他国の技術に明らかに負けているという事実。

そして、陸軍と海軍の不仲さゆえの、”本土上陸”への不安。

ああ、確かに。鬼という未知のモノへ執着するのは仕方のないことのように見える。

『そして進む先は……』

今は国際情勢も落ち着いて、まさに平和な世の中だ。

他国文化も多く流入し、同時に自国文化も広まりつつある。

街を見れば、洋服と和服のカップルが歩く様子。

後に”太正ロマン”と呼ばれる風景がそこにはあった。

だが、軍拡は止まらない。

皆知っていたのだ。

今ある平穏は、嵐の前の静けさなのだ。

それが意味するもの。

その先に待っているのは――

『――大戦』

言ったあと、苦虫を噛み潰したような表情になる中尉を見て、ニヤリと少将は笑った。

やはり従弟は優秀だと。

この駒は必要だと。

『もう多くは言うまい。陸軍憲兵中尉、甘粕正彦。貴公を鬼を軍部に取り込むための先駆け、”特務部隊”の隊長に任命する。まだ見ぬ”^{あした}未来”のため、尽力せよ』

『……っ』

『帝国に”勝利”以外は許されない。敗戦国の末路は知っているだろう？ それを踏まえ、軍人ならどうするべきか』

『……いいでしょう。拜命致します。あくまで”業務”として万全を尽くさせて頂きましょう』

『それでよい』

最も、中尉——もとい、大尉のこの渋々の態度は、この後そう遠くない内に一変するのだが。

それはまた別の話。

そして時は今に戻る。

「中将閣下、いかがされましたか？」

「なあに、懐かしいことを思いだしてな」

私は軍用ではない車に乗って、参謀本部へと戻る途中だ。運転しているのは、参謀本部直属の陸軍兵だ。

そして隣には——

「しかし、☒ヨ〇の自動車には敵わない。桑島重工も自動車に取り組みもうとした時期はありましたが、こうも乗り心地の良いものは作れません」

桑島社長。

現在聴取という形で軍に保護されているその人であった。

「桑島重工には火器弾薬でお世話になっておりますからなあ、そこは適材適所ですとも。そうそう、適材といえは——」

私はあの姉弟のことを思い出す。

ついさつきまで話、軍に属することを承諾してくれた鬼のことを。

今頃は憲兵隊司令部の地下にある、特務部隊本拠地で書類処理やら訓練の準備をしていることだろう。

あそこは私の教え子、特務部隊の副隊長に任せてあるから問題はな

い。
「娘さんは素晴らしい。鬼を許す。桑島社長の薬で人を喰いたいという衝動を抑られれば過去を不問にすると。その発想は私の描く未来に他ならんよ」

「中将閣下にそう言っていただけとは、製造者として光栄です。わざわざ鬼を薬漬けにし、調教して孕ませた甲斐があるというものです。して、弟の方は？」

「うぬ、あれはダメかもしれん。犯人を許さない、殺したいなどと、“普通” 過ぎる憎しみに囚われておる。やはり、想定とは違う形で軍部に取り込んだのが仇となったようだ」

「犯人……ええ、まさか私の父がこのタイミングでやってくるとは。完全に想定外ですね。お預かりしていたサンプルも殺されました、申し訳ない限りです」

「いや、社長があやまることではないとも。これは順調であったが故の、私の慢心でもある。これからはイレギュラーを常に大きく想定して動くでしょう。まあ、今回のイレギュラーに限っては、弟くん信明には悪いが、すでに処理は済んでおるがな」

「処理、ですか」

「ああ。姉弟エサの周りを張っていれば、ほれこのとおり。待機させた特務部隊隊員の狙撃で一発よ。報告によれば、急所は外れたそうだがかなりの出血らしい。“一般人” なら、もう死んでいる頃じゃろう」

「そう……ですか」

「少し意外なのだが……不満かね？」

「いえ。元はといえば、刀を振るうことしか教えない、父への反骨心から私は成り立っています。それで、桑島重工を立ち上げましたから……なので、ああそうだ」

桑島社長は、何かに気付いたかのような様子で目を閉じ、そして次に目を開いた時には、彼の心の中に、なんらかの整理がついたようだった。

「すみません、やはり満足ではないようです。最後は” あんな言葉” で別れるのではなく、認めてほしかった」

「……そうか」

「どうやら囚われているのは息子信明だけではなかったようです。私も、ここまでできてようやく自覚しました……まったく、血は争えないとはよく言ったものです」

彼はそう呟くように語る。

「すまんな、その後悔、私に預けてもらおうぞ。ここまで来て、もはやお前の協力なしに未来あしたはない。そのためにこれまで下地をつくつてき

「ただ」

「ええ、そうですね……すべてはまだ見ぬ未来あしたのために」

05. 「地下」

「4分50秒、に、さん……」

あれから数日経った。

私たちは憲兵司令部の地下、特務部隊の拠点で日々を過ごしている。

中將が言っていたように、私たちが鬼である以上、政府非公認の鬼狩りに襲われても対応できるよう訓練を受けていた。

ここである程度習熟すれば、外に自由に出る許可も貰えるし、任務につくことも許されるそうだ。

「し、ご……はい、お疲れ様」

「ハア、ハア……ふう。信明、どうだった？」

「だいたい4分54秒かな。すごいな、ねえさん。前回より2秒もはやくなってる」

「おお、そんなに。いつもより〃呼吸〃を意識したおかげかな」

「ねえさん、もともと運動神経いいしね。それで、〃呼吸〃——全身の細胞に酸素を送って身体強化をすれば、こういうタイムがでるわけだね。僕はそううまくいかないから」

ふと、信明の顔に影が差したような気がしたが……

私の視線に気が付いたのか、すぐに微笑を絶やさないうつもの顔つきに戻ってしまった。

「あー、そいえば歩かなくていいの？」

「……おっと、そうだった。走ったばっかだし、ちよつと歩いてくるね」

「分かった」

なんとこの地下拠点、陸上トラックがあるのだ。正確には、少し小さな地下運動場といった感じだが。地面は校庭のように土を被っており、線を引いて走るコースを作っている。

そこでこうして、1,500m走のタイムを測ったり、短距離、棒高跳び、走り幅跳び、投擲、砲丸投げ、ハードル走……と色々な種目も行っていた。

いや、訓練のはずなのになんで陸上やってんですかね。
課せられた鍛錬のメニューも、私の学園の陸上部のそれだ。

まあ、私としては慣れてるからありがたいんだけどね？

「よし、片付けも済んだかな……あ、ねえさんおかえり。じゃあ戻ろうか。これ水……つて、そんなぶんだけくつて、慌てて飲まなくても」

うるせえ、至福のひと時をじやまするでないぞ、弟よ！

「うぐ、うぐ、うぐ……ふはあ」

「どう？ もう少しゆっくりしてく？」

「ふい、ありがとう。もう大丈夫だよ」

そう言つて私はペットボトルを逆さにし、残っていた水を頭から全身に振りまいた。

水の重さの後に感じるその冷たさに体がビクンと震えるが、やはり走つた後の水浴びは格別だ。気持ちがいい。

「うし！ 副隊長のところに戻ろっか」

「ねえさんなにやってんの、いきなり水なんか浴びて……ツ!？」

「え、気持ちいいよ？」

「いや、えと……そうかもしれないけど、そうじゃなくて」

「……う？」

「その……服が」

「あつ」

まさかと思い、信明の視線をたどつて自身の身体をみれば——そこには納得の光景が広がっていた。

「透けてらっしやる……」

ランニングのために薄手の服を、というか学園の体操服をそのまま使っていたのだが、私がクールダウンのために浴びた水のせいで濡れ、体のラインが浮かび出るくらいぴったりと肌に張り付いていた。

そして、胸のあたりはブラの色が透け、黒白の境目がハッキリと浮かび、なるほど我のことながらこれは扇情的すぎる。

「とりあえず……」

未だに視線を逸らさない無遠慮な弟を見て、その方向へ一步踏み込んだ。

同時に、勢いのまま身体をひねり左足を軸として右足をしならせる。

「キヤー、ノブアキサンノエッチー！」

「は？ うごっフ!?!」

「いや、おかしいでしょねえさん。なんで僕が蹴られるのさ！」

「えーと、女子力アピール？ もしくは透けブラ凝視してた弟の矯正へんた？」

「は？ 大体、いつも下着姿で寝てるねえさんを、布団引つ剥がして起こしてるのは誰だと思ってるの。今更どうとも思っていないでしょ」

「いやあ、なんも言い返せないっすねえ……へへへ」
ええ、そうですとも。

いつもお世話になっておりますぜ、弟よ。

朝は——だめなんだ！

マジ感謝感謝。

「なんで嬉しそうにしてんの。褒めてないからね」

「ごめんって、そう怒らないですよ」

などと軽口をたたきながら——いや、信明を宥なだめながら、私たちは測定記録、もとい日報の提出のため、地下拠点の唯一常駐している副隊長の元へ向かっていた。

当然着替えは済んでいる。

私も信明も黒の軍服に袖を通していた。

現在、特務部隊の規模は”小隊”。

大体、人数で言えば30〜60人所属していることになる。

そこから、さらに4つに分隊を分け活動しているそうだ。

第一分隊は、特務部隊隊長である甘粕大尉が直接指揮している。

特に鬼と交戦が多く、精鋭を集めているとはいえ、死者も多くでているそうだ。

鬼を殺した実績は当然一番だ。

第二、第三分隊は兼任で、副隊長が分隊長として指揮をとっている。小隊規模で帝都全域、周辺までカバーすることは難しい。

そこで、副隊長がこの憲兵隊司令部、地下拠点から指示を飛ばし、流動的な配置変更と、鬼の捜査を行っているそうだ。

……と言いつつ、実は第一分隊の配置に関しては、この副隊長が権限を持っているらしい。

曰く、甘粕大尉はノリが良すぎると。

では、分析し、隊員同士の相性も踏まえ、完璧に部隊運用できるかと言えば、できなくもない。

しかし、ノリで全部ぶち壊す。

よって、仕方なく副隊長が大局を見て配置を決め、現場は大尉が動かすという形で収まったそう。

最後、第四分隊は中將が口出ししているとのこと。

いったいどういうことなのかと聞けば、ここに配置された人員は防衛。

すなわち、帝都の要所を守っている。

確かに知恵の牙城、参謀本部が落とされれば軍としておしまいだし、政治の面でも守らなければならぬ施設は多いだろう。

そういうものに口出し出来る立場にあるのは、関係者でいえば中將しかない。

まあ、この辺深くツツコミと長くなるのでここまでにしよう。

決して詳しくない訳じゃないぞ。うん。

「つまり、特務部隊は隊を4つに分けて、主に甘粕大尉が“攻撃”、今向かってる先にいる副隊長が2つの分隊分の人員を使って“調査”、最後、中將が主要拠点の“防衛”の指揮をしているってことだね」

「そうだね。そいえば、中將と副隊長以外、まともに話したことないよね、私たち。たまりに他の隊員の方が戻ってきてるの見るし、挨拶もするんだけど、すぐ出発しちゃうんだよね……」

「人手不足、そう嘆いてたね。信用に足り、かつある程度実力がある人となれば、見つけるのも大変そうだ。“人財”だなんて、よく言ったものだよ。それに、人が増えれば管理も難しい。実際、小隊規模の方

がフットワークの軽さや機密性でいえば妥当なのかも」

「……信明、いつのまにそんな難しいこと考えるようになったの？」

「ねえさん、わざわざ忙しい中、副隊長が色々教えてくれてるんだから聞いてあげなよ。あの人が泣くよ？ ただでさえブラックだーだなんてぶつぶつ呟きながら、死んだ目で仕事してるのに」

「うぐ……いや、できないわけじゃないけど、暗記とか考察とか苦手で……信明、私の分まで頑張ってくれ」

「は？」

「いや、私の分まで——」

「は？」

「……スイマセン、善処します」

二度目は少し食い気味だった。

やっぱり少し、虫のいどころが悪いらしい。

「さて、着いたね。ここが副隊長のいる執務室だ。このまま軽い講義だろうし、ちゃんと聞いててよ。ちよつとねえさん、今日様子がおかしいから心配だけど」

「はいはい。でもそれを言ったら、信明だってキレ気味じゃない」

「え……」

どうやら気付いていなかったという顔だ。

まあ、こんな地下での生活が続けばストレスも溜まるものかもしれない。

「ほら、眉間にしわが寄ってる。いいから入るよ」

「あ、うん」

ドアをコンコンコンと叩くと、中からどこか気だるげな女性の声で、どうぞーと反応があった。

「失礼します」

そう言って、私に引き続き信明が入室した。

その部屋を端的に表すなら、“汚部屋”であった。

それは埃だらけという意味ではなく、無秩序に散らばった惨状から語れる。

足の踏み場もないほど書類が散乱、あるいは雑に積み上げられ、人が進める獣道がギリギリあるかないかという具合だ。当然、本来それらを整理するための壁際の本棚などは、限界を超え、はみ出すほどぎっしりと詰まっている。

しかし、一つだけ安全地帯が存在した。

中央の大テーブルの上だ。

その中央のテーブルにも当然書類が山積みではあるが、地図——ここ帝都とその周辺のもの——の上だけなにもなく、ハッキリと“駒”がどこに配置されているか、一目でわかった。

いわゆる戦術マップだ。

そして、部屋の最奥には大きな機械が、各種壁いっぱいに置かれており、いくつつかのモニタには帝都の現在状況が映し出されていた。

ここは、件の執務室。

もとい、陸軍特務部隊の心臓だ。

この部屋から各隊員へ指示が出されており、その隊員が集めた情報や、鬼との実戦データなど総てが存在する。

そして、この部屋の主、真の部隊運用者である、特務部隊副隊長は——書類の山に埋もれて死んでいた。

「ちよっ、大丈夫ですか!」

「信明、掘り起こすよ! 手伝って!」

「う、うん」

狂い哭け、おまえの末路は“過労死”だ。

副隊長という役目を押し付けられた少女は、数多の管理職的業務を押し付けられ、今や虫の息であった。

そのうわ言からは、『私、この仕事が終わったら転職するんだ』、『前の神祇省はよかつ——そうでもなかったな』、『頼む、力を貸して私の英雄——!』などと、訳のわからないことをぶつぶつとこぼしていた。

もう色々ダメかもしれない。

それでも必死に揺さぶり起こすと、青白い顔の少女はさらに顔色を

悪くして、感謝の言葉とともに姉弟を押しつけるようにして奥の機械に飛びついた。

どうやら手元の資料を見ながら、誰かに連絡を取っているらしい。その様子から、どうやら望まぬ睡眠で時間を浪費してしまっていたようだ。

だがその失態も、彼女はてきぱきと動きすぐに挽回する。

曰く、優秀なのだ。

元々は広島の山奥で修業し、神祇省の戦闘部隊へ所属していた彼女であったが、やりたいと思つたことを即座に迷いなく実行す神祇省の頭領に、特に理由もなく陸軍へ売りはらわれた。

そのまま川を流れる小枝のごとく、あれよあれよという間に大尉に見いだされ、中將のしごきを受けて副隊長の座に収まる。

彼女の不幸はここからだ。

なにせ、戦闘の技能よりも内部処理の能力に恵まれていたのだから。

御すものとしての才能を開花させてしまったのだから。

でなければ、一般人だったら月月火水木金金のようなクソブラックになるであろう仕事を期間内に終わらせられないし、耐えられない。できるとわかってしまえば、この通り。

次の、次の、次の——そしてまた次の次の次の試練しじけんがやってくる。できなければ、押し付けおしつけられない。

これは究極の真理であった。

悲しきかな。

汝、仕事の殉教者よ。

仕事を終えて楽になりたいという彼女の願いとは裏腹に、その量が減ることはないのだ。

故にこの、どこに何があるかわからない書類だらけの部屋も、彼女にとっては総てを把握した楽園じやくくであった。

そして、総てをせわしくこなし一段落つき、ごめんねと姉弟へ向ける笑顔には明らかな疲れがでていた。

「えっと、無理しないでね」

姉の言葉に、分かったそのように弁える、とどこか古風な言い方で少女は答える。

そのくだけた口調からも分かるように、彼女たちは仲が良かった。年の差も少ない同性というなら言わずもがな。

中将に紹介された瞬間から、相手の目を見て、あつ、こいつも同じく不幸な目にあつてここにいるんだなど通じ合っていたのだ。

それはさておき。

ここにいる意味は一つ。

技術と知識の教導に他ならない。

そして、姉弟にとつて、少女ほど最適な先生もいなかった。

なにせ元は、生粋の戦闘屋。

身を守るためにも戦いの指導、それを実戦で学べるのだ。

そして知識面でも、中将お墨付き。

務める機関が変わっても、すぐに陸軍省のスタイルに合わせ、その内政能力を開花させた彼女に隙はない。

その優秀さが仇となつて、頼られ任せられ、地獄のサイクルを享受することになっているのだが……

とにかく、鬼の力をどれだけ炸裂させても大丈夫な地下拠点に、同年代で話しやすい、優秀な師匠。そして地上は憲兵司令部という一般的には安全な環境に違いはなかった。

込み入ったことは知る必要はないし、知るべきでない。

そういうのは“上”が全部管理して、納得して事は進んでいるのだから。

重要なのは、こうして姉弟は部隊の一員として戦力として育てていったということのみ。

隊員の調査結果も含め、鬼を戦力として扱う準備と、データ収集が進んでいく。

そう着々と、中将の望む“未来”あしたへと世界は進んでいっているの

だ。

それはありえないほど順調に、しつかりと。

歯車は狂いもなくかみ合い、世界は一定の速度で回り続けていた。

「うふ、ふははは、あはははははははははは——！」

しかし、あるいはだからこそ、

響き渡るは蠅声さばえの囁い。

蠢く黒い集合体は、世界を嘲笑うように喉を震わせる。

そして何の前触れもなく、その声はスーッと静まっていった。

まるでそれは白昼夢。

そこには元々何もなかったかのようだ。

それを視界の一端に捉えたものでさえ、明日には忘れているだろう。

そんな“予兆”、人々は露知らず。

「帝都はいつもの喧騒に包まれ、何気ない“日常”が永遠に続いてい

くと、彼らは信じている。

<後編>

06. 「鬼」

ばんせいごくらくきょう
万世極楽教。

“ 穏やかな気持ちで楽しく生きる” 事を教義として掲げており、“ 辛いことや苦しいことはしなくていい。する必要がない” と説く、信者約250名の宗教団体だ。

その最奥聖域。

目の美しく若々しい緑色の畳と、巧みな意匠のこらされたふすまに囲まれた部屋に一人の男がいた。

「むうう、誰も彼もつれないなア」

男はため息をつきながら、そうぼやいた。

見かけは、この部屋に相応しく高貴で、神秘的な雰囲気を漂わせてはいるものの、その輝きはどこか妖しいものが混じっていた。

「俺が紹介した妓夫太郎は死んじゃったし、下弦の壺は蠅みたいに なって裏切るしで、あのお方もご機嫌が悪い」

男は、怒りに囚われた主のことを思い出す。

わざわざ男の様な——おそらく好いてはいないが力を認めている
——者を、主は呼び出した。

その理由は明らかだ。

部下駒の死亡と、裏切り。

特に、“ 呪い” を解いて裏切ったその部下は、それ以降、嘲るかの ように主あるじの元に現れては、ひと笑いしてさつていくという、この上なくウザったい嫌がらせをしているらしい。

そもそも男も主の護衛についたことがあったが、あれはもう男の “同類” の域を越えている。

男の全力に、主がいれば——などとは甘い考えで、それでも殺せなかった。

あのお方を除いて、男にとって唯一格上の者も護衛についたし、共にその“害虫” 駆除に取り組んだりもしてみたが、やはり死なない。

長いこと時間をかけ、元同僚はどうやら何かの依り代にされ、その
“何か”が蠅の正体だとまでは分かったが……

依り代にした術者はだれかと聞いても、蠅ははぐらかすばかり。
どうやらこれ以上は無駄だと、主は諦めたようだ。

というか、そんな蟲むしに構かまっている余裕がなくなってきたのだ。

「新たな天敵の話もあるし、いい話は聞かない。だから仕方ないね！」
帝国陸軍だ。

その死んだ部下も裏切った部下も、男の同僚——12人いる主の親
衛隊に他ならない。

当然その力は、並大抵のものではなく、まして死んだ部下は男と同
じ“上弦”という階級。

それが“鬼狩り”などではなく“ただのヒト”に狩られる等あつ
てはならないのだ。

「よし、妓夫ぎゆうたろう太郎の代わり、新しい上弦の陸ろうくは責任をもつて俺が育てよ
う。死なれるとあのお方の機嫌きげんが悪くなる。それに、見つけてきた
黒死こくしほ牟殿は放任主義みたいだしね」

男は名案だと、自画自賛して笑みを深めた。

見る人が見れば、まるで仏の様など形容される笑みだろう。

もはや、死んだ部下のことなどどうとも思っていない様子であつ
た。

さて、あの元鬼殺おにころしし、どう育ててやろうかと思案に入ろうとすると

——襖ふすまにトントントンと静かな音が響いた。

「教祖様、神祇省じんぎしょうの首領を名乗る方がお見えです」

「ああ、本当かい？ 待たせてすまないね。じゃあ、ちよつとこれをか
ぶってから——」

その瞳は、一般人のそれとは違っている。

左には「上弦」、右には「弑」の文字が刻まれていた。

教義では神の代理人故の証であると、そんな風に信者に伝えてはい
るが——

「どうぞでどうぞ、入ってもらっておくれ」

この男、“教祖”の名前は童磨どうま。

十二鬼月が次席、俗にいう人喰いの“鬼”である証に他ならない。

「ねえさん、行きたい場所があるって言ってたけど……ここ？」

帝都。

僕らの住む街であり、帝国の首都だ。

道路や交通機関が整備され、路面電車や乗合バスが市内を走行し、絶えずヒトが行きかっている。流入する最新の欧米文化を富裕層が受け入れて広まり、モダンな芸術・文化・生活様式の中心地でもある。そんな中、今僕たちがいるこの銀座、大帝国劇場前は、例にもれずたくさんのヒトに溢れていた。

「そう、帝劇。次の大規模作戦まであと1日。久々に外出許可も出だし、せっかくだから皆で来てみたかったの」

鬼を調査する“特務部隊”、ここに入隊してから約半年。

僕たちは着実に実力をつけ、帝都の“野良”を相手に負けない程度の力をつけていた。

しかし、それでも生粋の軍人である他の一般隊員の方や、隊長、副隊長には……うん、勝てる気がしない。

というか、指導してくれている副隊長には、僕と姉の連携攻撃でさえかすりもしない。

元は神祇省というところの戦闘部隊だったらしく、そのすばしっこさと熟達した釵さきの扱いで、どれだけ“血鬼術”を使っても軽くあしらわれる。いったいどんな訓練をしてきたらあの領域まで辿り着けるのだろうか。

まあ、それはともかく。

“皆”と言う割に、僕たちは二人だ。

それもそのはず。本来なら、僕たちの恩師で、友人である特務部隊の副隊長を引っ張ってきたかったのだろうが――

「よく考えれば、明日出撃だっというのに副隊長が暇なわけないよね……」

残念ながら、彼女は憲兵隊司令部の地下拠点で仕事だ。

実は昨日までは、行く気満々で楽しみだなあと満面の笑みでウキウキした様子だったが、当日、今日の朝中將に呼び出されていた。

「目が死んでたね、戻ってきたとき。その後で私たちを見送ってくれた時も、なんていうか……笑顔だけど笑顔じゃなかった」

「そうだね。あの人には長いこと稽古をつけてもらった恩もあるから、何か力になれたらよかったんだけど」

こういう時、友人ではあれど序列というものを思い出す。

今回は前回に続き、二度目の大規模作戦。

相手は、僕たちみたいない一般隊員が相手にならない鬼の幹部クラス。

すでに、今回の標的を調査していた熟練隊員の連絡は途絶え、数日。

一刻の猶予もないのは確かだろう。

「前の大規模作戦、“吉原遊廓殲滅戦”以来、鬼の動きは活発だ。特務部隊のおひぎ元である帝都で、今まで以上に行方不明や殺人事件が起きています」

「あー、もう嫌なこと思い出させないでよ……あつ」

「鬼は、一匹たりとも投降しなかった。呪いだの、あのお方だの……ボスがいるんだ、鬼の。そいつを潰さなくちゃ、ねえさんの言う”許す”ということさえできないだろう」

「まあ、それは……えーと」

「ねえさんだって分かってるだろ。鬼は、どうしようもなく終わっている。僕たちが”特例”だってことも」

「信明、ちよつと」

そう言われて、僕は姉に手を引かれる。

そのままずんずんと、街道から離れ、脇道に進む姉。

ついにはよほどのことがない限り、人が来ないだろうというところまで連れてこられた。

「守 秘 義 務ー」

「えっ？」

「往來でペラペラ、ペラペラとお！ 見てたよ。ここに来るまでにす

れ違った、あのめっちゃやくちや美人の貴族っぽい女の人と細身な執事の男の人が」

「うわっ。ご、ごめん」

気付かなかった。

どうも僕の目には、ねえさんしか入っていないなかったらしい。

言われてみれば、ここに来るまでに何か香水のようなあまつたるい匂いを嗅いだような気がするが……往來の人の様子なんて気にもしていなかった。

「信明、どうしたの？ 普段なら、こんなミスしないよね？」

「うん。ほんとごめん」

確かに、ねえさんは思わず見入ってしまうような美人である。

弟びいきとか、家族びいとかではなく。

身体のラインに沿った長い黒髪に、ぱっちりとした引き込まれるような紅色の瞳。

今は学園のセーラー服を着ているが、ほっそりした身体もあいあまり、むしろ犯してはいけない聖域を連想させる。

って、なんだこれ。べた褒めじゃないか。

僕はシスコンじゃない。

ノーマルだ。

だからニーソの絶対領域とか、し、すいらないし！

意識すると自然と目線も、その発達途上の胸に……昔見ていた朝の白い肌に黒の下着姿も重なって——って、ああ、クソ！

「信明？」

思えば、貴族みたいな女性とその執事の視線が気になったって言うてたけど——その執事、本当はねえさんを見ていたんじゃないか？

いやらしい目で。

だと思つと、あー、なんかイライラしてきたな。

理由は明確には分からない。僕にあるのは、ただそれが不快だということだけだ。

ならばこれはもう選択肢でいうと、『振り抜く』を選ぶしかないのではないだろうか。

その顔面、滅尽滅相だ。

「すまない、ねえさん。僕ちよつと——」

ふと、黒い点が——蠅が目の前を横切った気がした。本能的にか、汚さからか、嫌悪感が湧き出る。

だからだろうか。

無意識に雷を迸らせ、その蠅を焼き殺していた。

「ちよつと、いきなり血鬼術なんて使って。どうしたのよ？」

「……いや、なんでもない。本調子じゃないみたいだ」

「やっぱ日の下はだめかあ」

「あ、だから劇場だったんだね。室内の」

どうやら姉は僕のことを気遣ってくれていたようだ。

嬉しいと思う反面、この長い付き合い、その程度も察せてもいなかった自分に不甲斐なさを感じた。

「まあね。でも、もういつもの信明って感じだね。開演時間ギリギリだし、行こうか」

「重ね重ねゴメン。今日は何か嫌な予感がするから、僕は帰るよ」

「……え？」

一人で楽しんできてと、僕はねえさんに背を向けた。

そう、これは逃げだ。

気付きかけた感情に、改めて蓋ををするための。

だから、そのか細い声で呟いた彼女の顔は見る事ができなかった。

そのまま、雑踏の方へ一目散に進んでいった。

去り際、何か言われた気がするが、気のせいだろう。

「せっかくあの娘が気を効かせてくれたのに……バカ」
だから、何も聞こえなかったのだ。

劇場では、花の乙女たちによる渾身の演劇が行われている。それを見下ろすような、貴賓席でその主従は劇を見ていた。そう眺めるだけ。

作品に感情移入し、魅入るまでには至っていなかった。

「さて、明日ですね」

「……そうですね」

「甘粕大尉はどのような演出をなさるのでしょうか。わたくしは楽しみでなりません」

「……さあ、俺にはわかりかねます」

「なに、不満なのは分かりますよ。安心してください、わたくしはこの劇のように見るだけです」

それ以降、主従は何も語らない。

お嬢と執事は、ここでは部外者。

なにか口を挟むというのは、無粋なものだろう。

「ただ……」

お嬢は考え込む。

甘粕大尉の言う“勇氣”は私の求めるものなのかと。

「部外者のわたくしに言うことはありませんね」

そう、重ねて言うが彼女たちは此度において部外者。

お嬢と、執事、そして名も知らぬ無骨な男——彼らが主演の愛憎劇の幕が開けることはない。